

# 館外企画展 Japan Color

## シリーズ Where Culture Meets Nature ～日本文化を育んだ自然～

期間 令和元年8月30日～9月16日

場所 花洛庵（野口家住宅／京都市中京区）



主催 自然史レガシー継承・発信実行委員会\*（事務局：兵庫県立人と自然の博物館）  
兵庫県教育委員会、兵庫県立大学自然・環境科学研究所

\*北海道博物館、栃木県立博物館、国立科学博物館、三重県総合博物館、琵琶湖博物館、伊丹市昆虫館、  
大阪市立自然史博物館、きしわだ自然資料館、橿原市昆虫館、北九州市立自然史・歴史博物館



写真:左) 岩絵具と鉱物や日本画に使用する筆とその材料となる動物を和室の空間に合わせて座卓上に展示。  
右) オオセンチコガネの標本をグラデーション状に配列。同じ種でも、地域の特性や多様性が一目で理解できる。

世界の博物館関係者が一堂に会する国際博物館会議(ICOM)が2019年9月に京都で開催されました。ICOMとは、3年に一度開催される博物館のサミットで、博物館のあり方や課題が議論されます。今大会では、世界中から約4600名が集まりました。当館では、この機会を活かして、国内の11館と連携して、重要文化財に指定されている京町家・花洛庵野口家住宅を舞台に、日本の色“Japan Color”をテーマとした移動展示会を開催しました。通常の展示会とは違って、会場である歴史的建造物が持つ空間の趣と、自然史標本が有する美しさ、そして和のしつらえによる実験的な展示技法を駆使し、五感を通じて、日本文化と自然との関わりを実感してもらえよう工夫しています。一般向けの展示会ではあるものの、むしろ国内外の博物館関係者に向けた新たな展示技法を提案し、技をアピールする場にもなりました。

この取り組みは、3年前の2016年度から準備を進め、文部科学省・文化庁の委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」の支援で実施しています。目的は、伝統文化や地域資源の魅力、観光としての価値を、博物館の展示を通じて発信する実践モデルの開発です。今回の連携チームでは、特に歴史的建造物の活用に主眼を置いた展示

技法の開発と実践に取り組みました。2016年度に花洛庵で展示会を行い、2017年度は伊丹市の旧岡田家住宅・酒蔵、2018年度は京都市下京区の龍岸寺で開催してきました(右上QRコードからWebページ参照)。文化財であるため、家屋には釘や金具、テープが使えない他、照明の配線や設置にも工夫が要ります。展示ケースを使わず、安全に固定し、近い距離で見せるための什器や見えない境界・結界づくりなどレイアウトにも工夫を凝らしてきました。

今回の“Japan Color”展は、これまでの知見を活かした総決算で、歴史的建造物と自然史標本の組み合わせは親和性が高く、地域づくりの新たなツールとなる事を多くの人に発信したいと考えています。



京都市重要文化財、花洛庵野口家住宅。現在も着物の展示会などで利用されている。暖簾は、藍染めで海を表現。



写真:左上) 日本産の蝶類と岩石標本を色ごとに展示。右上) ウミウシ類の色彩を残して展示する新技術の標本。  
左下) 植物染色による絹布と材料となる植物、江戸後期のベニバナ染色の振袖、絵柄となっているタンチョウとコウノトリ、アカウミガメ、絹の原料となるカイコ等を展示した。右下) 茶室の土壁と丹波焼きとカモシカ。

展示では、伝統工芸品や美術品とその素材となる自然史標本を中心とし、出来る限り展示ケースを使わずに、近い距離で見られるよう工夫しました。植物染色による絹布や着物と植物標本、日本画とその画材の岩絵具の原料となる鉱物、様々な筆と素材となった動物のはく製を座卓に並べて展示したり、土壁の茶室にカモシカのはく製と丹波焼の花瓶を並べるなど、非日常的な雰囲気 연출しつつ、自然の恵みを強調しています。日本全国から採集されたオオセンチコガネの色の地域変異が分かるようカラーグラデーション状に配置するほか、日本産の蝶と鉱物を色別に分類して展示するなど、自然が生み出す色の多様性を一目で分かるように工夫しています。玄関口には、曙と呼ばれる古来からの藍染の技法によって染めた暖簾を使い、夏らしく海を表現しています。

また、ウミウシや植物標本の色を保存する最新技法を用いた標本などを展示しています。詳しい内容はWebページをご覧ください(右上QRコード)。

展示会は、ICOMが盛況であったこともあり、短期間ですが、2100名と多くの方に来場いただきました。北海道から沖縄まで、海外からも約30か国以上の方々に来られました。靴を脱いで畳に座って間近でみる体験は新鮮だったようで、日本文化の場に没入して楽しめたとの感想がありました。自然愛好家だけでなく、地元の人、工芸職人や織物業界、人文歴史系の愛好家など幅広い層の方が訪れ、次は自然史博物館や野外観察に出かけてみたいとの感想も多く、移動展示会が文化と自然をつなぐ架け橋になったのではないかと思います。

三橋 弘宗(自然・環境マネジメント研究部)